

保育実習 I (保育所)事前指導における実習記録の指導内容 ～視覚教材の活用について～

保育実習 I (保育所) 担当 島崎 あかね

1 年次後期に開講されている「保育実習 I (保育所)事前指導」は、1 年次春季休業期間中に行う保育所での実習に向けた事前指導であるが、夏季休暇中に行われた教育実習の経験から各自の課題をより明確にし、必要かつ具体的な指導を行っている。受講している学生の多くが教育実習の反省・感想として「実習日誌の記入が大変だった」「日誌の記載に時間がかかった」など実習日誌に関する内容を挙げている。実際に実習園で体験した内容を「日誌」という形式で記載するためには、どのような観点を持ち文章化するかが重要となってくる。

本稿では保育実習の事前指導で行っている「実習日誌の書き方」の講義内容について記載する。事前指導では約 3 年前から映像を活用した指導を行っている。これは上田市のある私立保育園に協力を依頼し、年中クラスの 1 日の保育の流れをビデオカメラに収め、実際の保育内容を観察することで保育を疑似体験し、ビデオ画像により観察した内容を日誌の内容として記載するという方法である。映像は、朝の自由あそびの時間から全園児による朝の体操、クラス別の主活動（制作）までをできるだけ実習生の目線となるように工夫した。映像の概要は以下の通りである。

<場面 I の概要>

○自由あそび

登園後の各自が保育室内で自由に遊んでいる。担当保育者 2 名（A・B）が子どもたちの遊びに入りながら、その様子を見守っている。ブロックやおもちゃを広げ、仲の良い子ども同士数人のグループになってそれぞれが遊んでいる。時々、保育者が子どもの輪の中に入り声をかけたりクラス全体の様子を見守っている。なお当日はビデオ撮影に同行した本学教員（当該園で月 2 回程度、音楽指導を行っており、保育者および子どもたちとも交流がある）もその中に入り、子どもとかわっている。

○片づけ

保育者 B がピアノを弾くと、子どもたちは一斉に片づけを始める。このクラスでは先生の弾くピアノが片付けの合図として子どもたちに理解されており、保育者 A はブロックを片付ける箱を部屋の中央に出したり、「お片付け頑張ってる」などの声をかけ、子どもたちが自分で片付けられるような配慮を行っている。途中、子ども同士のトラブルがあったようで、女児が泣き出してしまったため保育者 B は他の子どもからその女児を離しピアノの影に連れていき事情を確認している。その後トラブルの相手と思われる男児もピアノの影に呼び、それぞれから事情を聞いて解決に導いていく。

○トイレに行く

片付けの終わった子どもからトイレに行く。それぞれトイレの前で上履きを脱ぎ、トイレ後は手を洗って保育室に戻ってくる。その様子を保育者は見守りながら片付けの終わらない子どもを手伝ったり、ブロックの入った箱を部屋の隅に片付けるなど次の活動への準備を進める。

○整列・ホールへの移動

園全体（すべての保育室）に音楽が流れ始めると、子どもたちは自分の紅白帽をロッカーから取り出してかぶり、移動のための整列を始める。上履きを置き忘れていた子どもや自分の紅白帽が見つからな

い子どもなどがいると、保育者Bはそれぞれの子どもの目線に立ち必要な援助を行う。保育者Aは整列しやすいように部屋の入口に立ち、子どもが2人ずつで手をつなげるよう、またまっすぐ並ぶことができるよう声をかけたり並ぶ位置を教えたりしていく。

○朝の体操

各クラスの部屋から全園児がホールに集まると、朝の体操を行う。お手本をする先生は全園児の前に立ち、子どもたちにわかりやすいよう大きな動きで体操を行う。

<場面Ⅱの概要>

○クラス別活動

今回のビデオ撮影に対する保育者Aの配慮により、クラス別活動は「折り紙で秋の果物を作る」という制作活動が行われる。折り紙で大小4つの柿を折り、各自のスケッチブックに柿を張り付けるという活動である。

導入として「日本には四季があること」ことを理解させ、この時期に目にすることの多い果物について実物を子どもたちに見せることで興味や関心を広げていく。

折り紙で柿を折ることを伝え、折り紙を配る。通常の大サイズの折り紙を1枚ずつ配り、見本を見せながら子どもたちと一緒に折っていく。折り方のポイントや約束事はその都度確認し、子どもたちのペースに合わせてながら折り進める。

保育者Bは折り紙の配布や折り方のわからない子どもに対して適宜援助を行い、それぞれの子どもがスムーズに制作活動ができるように子どもたちのところを順次回っている。折れた子どもから通常の1/4の大サイズの折り紙を3枚ずつ配り、合計4つの柿を折れるようにする。途中、子ども同士で教えあう姿や早く折れた子どもがクレヨンで葉を緑色に塗る姿が見られる。

大多数の子どもが4つの柿を折ったところで、各自が自分のロッカーからスケッチブックを取り出し、クレヨンで木の幹を描き折り紙の柿を糊で貼り柿の木を完成させていく。

場面Ⅰにおける気づきとしては、おおよそ次のようなことが考えられる。

- ・床にブロックを広げて遊ぶ子どもに対し、保育者が声をかける時の姿勢はどうなっているか。
- ・遊びが発展するような声掛けにはどのようなものがあるのか（ビデオでは音声が入っていないため、想像するにとどまる）。
- ・片付けの合図と声掛け、その後の援助にはどのようなものがあったのか。
- ・子ども同士のトラブルについて、保育者はどのような配慮を行っていたのか。
- ・クラス内での活動からホールへ移動する際、保育者はどのような配慮を行っていたのか。

場面Ⅱについては、主活動の「導入・展開・まとめ」の流れ、および場面に応じた子どもの様子や保育者の配慮について以下のような点に気付くことが考えられる。

- ・「秋」を含め、四季について子どもたちが理解しやすいような内容はどのようなものがあるか。
- ・「秋の果物」を意識できるように実物を見せることで子どもたちの興味を深め、活動への期待感を高めるような声掛けにはどのようなものがあるか。
- ・活動の際に日常的に行われている約束事にはどのようなものがあるか。
- ・折り紙の折り方をわかりやすく説明する方法や約束事にはどのようなものがあるか。

- ・子どもたち1人ひとりの進度に対して、保育者はどのような配慮を行っているのか。また子ども同士でどのように協力し合い活動を行っているのか。
- ・活動はどのようにまとめられているのか。

ビデオは学生が実習生としての目線で見るとであろう光景を意識して撮影したため、「見学実習」としての日誌を位置付け、それぞれの場面、活動に応じた子どもの動きや保育者の援助及び留意点などにどのように「気づく」ことができるか、を主として記録を取らせ学生同士で意見交換（相互添削）を行った。多くの学生は、それぞれ友人の記録を添削しながら、自分とは違う「視点」や「気づき」を確認したり、同じ「気づき」に共感したりする中で、保育者による援助の意図や子どもの心情について考察することができるのではないかとと思われる。

実際の園での活動は、それぞれのクラスや活動内容により援助の仕方や内容、子どもたちの様子も大きく異なると思われるが、この視覚教材の狙いとしては、「(活動などの) 事実だけを観察するのではなく、その時の保育者の援助や声掛けにどのような意図や思いがあるのか、子どもたちはどのような気持ちで活動に取り組み、それをどのように表現しているのか」ということに気づき、文章化することである。

ビデオ画像を通して保育を疑似体験する中で保育者の援助や配慮、子どもたちの活動の様子を観察し、そこに含まれる様々な意図や心情を考察し、実習記録として記載することの練習は、学生が実際に実習に臨んだときに少しでも「気づき」を深めることに役立てて欲しいという願いから取り入れている。今後もこのような視覚教材を始めとする、より実践的な教材を活用した指導を行っていきたいと思っている。